

# アラビヤンナイト

## 四、船乗シンドバッド

菊池寛

青空文庫



バクダツドの町に、ヒンドバツドという、貧乏な荷かつぎがいました。荷かつぎというのは、鉄道の赤帽のように、お金をもらって人の荷物を運ぶ人です。

ある暑い日のお昼から、ずいぶん重い荷物をかついで歩いていましたが、しずかな通りへさしかかった時、大そうりっぱな家が立っているのが、目に入りました。ヒンドバツドは、その門のそばで、少し休むことにしました。

その家は、とてもりっぱでした。ヒンドバツドは、まだこんなにりっぱな家を見たことがありますでした。家のまわりの敷石の上には、香水がまいてありました。

ヒンドバツドの足は、つかれて、熱くなっていたものですから、その敷石は大へん気持がようございました。

そして、開いてあるまどからも、何ともいえないいい香りが、におってきていました。

ヒンドバツドは、まあ、こんなりっぱな家には、いったい、どんな人が住んでいるのだろうかと思いました。

それで、玄関に立っている番人に、

「これはいつたい、どなたの家ですか。」と、聞いてみました。

この番人は、ずいぶん上等の着物を着ていましたが、ヒンドバッドの言葉を聞いて、目をまるくしました。そして、

「まあ、お前さんは、バクダッドに住んでいながら、私のご主人さまの名を、知らないというのかい。船乗のシンドバッドさまといって、世界じゆうを船で乗りまわして、世界じゆうで一番たくさん、ぼうけんをした方じゃないか。」  
と、言ったのでした。

ヒンドバッドも、今までたびたび、このふしぎな人の名前と、その人が大したお金持であるというわさは、聞いていました。それで、ははあなるほどと思って、もう一度、その御殿のような家を見上げました。それからまた、上等の着物を着ている番人を、じろじろ見ていました。そのうち、だんだん悲しくなってきたし、また、ねたましくもなってきました。

「あああ。」ヒンドバッドは、そう、ため息<sup>いき</sup>をついて、荷をかつぎ上げました。そして、天をおおぎながら、ひとりごとを言ったのです。

「まあ、なんて、ここの家の主人と、私とは、ちがうのだろう。まるで、天と地とのちがいだ。ここの家の主人は、毎日々々、お金を使いたいだけ使って、その日その日を楽しく

遊ぶよりほかには、何にもすることがないのに、私ときたら、朝から晩まで、せつせと汗あせを流して働いても、やっと、まずいパンを少しぼつちしか、買うことができないんだ。ああ、ああ、まあどうしてこの人は、そんなに仕合せになれたんだろう。そしてまた、私は、どうしてこう、年がら年じゆう貧乏なんだろう。」と。

そして、三十メートルばかり歩いていると、一人の召めしつかい使が追っかけて来て、後からヒンドバツドの肩をたたきました。そして、

「家のだんなさまが、お前さんに会いたいから、つれて来いと、おっしやられた。さあ、ついておいで。」

貧乏な荷かつぎは、びつくりしました。きつと、さっきのひとりごとが、聞えただな、と思つたものですから。

けれども、召使は、そんなことにはおかまいなしで、さつさとヒンドバツドを家の中へつれて入り、大広間おおひろまへ通しました。

大広間には、大勢のお客さまが、テーブルをかこんで腰こしかけていました。テーブルの上には、おいしそうなごちそうが、いっぱいならべてあります。一ばん上座じょうざに、まっ白いひげをはやしたりつばなおじいさんが、どつしりと腰かけていました。この人がシンドバ

ツドだったのです。

シンドバッドは、びっくりしているヒンドバッドの方を向いて、にこにこしながら、自分のとなりへ来て腰をかけるようにと、手まねきをしました。

そして、ヒンドバッドが腰をかけると、テーブルの上のごちそうを、とってやるようにと、召使に言いつけました。

召使は、ヒンドバッドの前の皿さらに、ごちそうをたくさんもり上げ、コップには、上等のお酒をなみなみとつぎました。

ヒンドバッドは、これは、ゆめではないかと、思いはじめました。

ごちそうをたべ終わってから、シンドバッドはヒンドバッドの方を向いて、さつき、まどの外で、何を言っていたのか、と聞きました。

ヒンドバッドは、大そうはずかしくなって、思わずうなだれてしまいました。そして、「だんなさま、ごめんください。あの時は、大へんくたびれていたものですから、ついで、ばかげたことを言つて、失礼しつれいいたしました。どうぞ、お気におかけくださいませんように。」と、言いました。

シンドバッドは、

「いや、なんで私が、お前さんをとがめたりするもんですかね。私は、お前さんを、ほんとうに気の毒どくだと思つていますよ。けれどもお前さん、私が、しじゅうのんきにくらしているのだと、思つちやあこまります。それからまた、らくらくとこの財産ざいさんをつくり上げたと思つても、いけませんよ。これまでになるには、何年も何年も、全く命がけでかせいだからなんです。」と、言いました。

それから、ほかのお客さまの方へ向きなおつて、

「そうです、皆さん、私が今までに出あつた数々のぼうけんは、どなたにだつておできになることではありません。私がきようまでにした七へんの航海こうかいの話は、まだ一度もお耳に入れたことがありますでしたが、もしも皆さんが聞きたいとお望みになるのなら、今晩からはじめてもいいと思います。」  
と、言いました。

それから召使に、荷かつぎの荷物を、家までとどけてやるように、と言いつけました。  
ヒンドバッドは残つて、一番はじめの航海の話はなしを聞くことになりました。

一番はじめの航海の話はなし

私の父は、かなりたくさんの財産を残して死にました。その時分、私はまだ若かったものですから、それをむだ使いして、も少しですっかりなくなるところまでゆきました。しかし、これはうっかりしていると、貧乏人になってしまふぞと、気がついたものですから、急に大決心を起しました。そして、残っているお金をかぞえてみて、商売をすることにきめました。それから私はぼうえき貿易商人の仲間へ入り、船に乗りこむことにしました。次から次と、船がみなとつくと、持つて行つた品物を売つてお金にしたり、また、あちらの品物ととりかえつことをしようと思つたからです。

まず、私の、一番はじめの航海がはじまりました。

はじめの二三日は、私はだいぶ、船によいました。けれども、やがて、だんだんなれてきて、よわなくなつてしまいました。

さて、ある夕方のことでした。風がびつたりとしずまつて、船のゆれも、ばつたりとまつてしまいました。

ちようどその時、私どもは、青々と草のはえた、平たい小さな島のそばを走つていたのです。その島は、まるでまきば牧場のようで、その向うに青々とした海が見えていました。船長

はみんなに、この島へ上って、少し休んでもいいと言いました。

私どもは大よろこびで、さつそく、この緑の牧場に上りました。そして、そこらじゅうを歩きまわったり、寝ころんだりしました。中でも、私たち五六人の者は、たき火をして、晩ごはんをこしらえようと思いました。

やっと、たき火がもえついた時分でした。船から、大きな声で、

「早く、帰って来ーい。」

と言う声が、聞えました。

私どもが、島だとばかり思っていたのは、ほんとうは、ねむっていた、くじらの背せなか中だつたのです。

みんなは、波なみうち打ちわへつないでいたボートをめがけて、いちもくさんに走り出しました。けれども、私がまだボートまで行きつかないうちに、早くも、このくじらは、海の中へもぐってしまったのであります。

私は水の中で、ずいぶんもがきました。そして、やっと板きれにとりつきました。それは、たき火をするために、船から持って来たものでした。

ところが船では、何かごたごたがあつて、私のことなんか忘れていたらしいのです。船

長は、風が吹き出すと、船を出してしまいました。

私は、波にもまれながら、とうとう、おき去りにされてしまったのであります。

それから一晩じゆう、私は水につかっています。そして、朝になった頃には、もうへとにくたびれてしまって、死ぬよりほかには仕方がないと思っていました。

けれども、ちょうどその時、大へん大きな波がやって来ました。そして、私を持ち上げたかと思うと、ある島のがけの下へ打ち上げました。

うれしいことには、そのがけは、よじのぼることができました。この上は、青々と草のはえた原っぱでした。そこで私は、まず何よりも休みました。

すぐに気分がなりました。けれども、大そうお腹なかがへっていたので、何かたべる物はないかとさがしに出かけました。

少し行くと、おいしそうな果物くだものの木がありました。そのそばに、きれいな水がふき出している泉いずみもありました。

私はそこで、まず食事をすまして、また何かほかにないかと思って、島の奥おくの方へ歩いて行きました。

すると、ほどなく牧場に來ました。馬が、あちこちにはなしてあって、みんな草をたべ

ていました。

しばらく、ぼんやり立っていますと、人の話し声が聞えてきました。耳をすましている  
と、それがどうも、地の下で話しているようなのです。

まもなく、草の間にかくれてあった穴から、ぬうーっと人が一人出て来ました。そして、  
私を見つけると、お前はだれか、どこから来たのか、とたずねました。

それから、私を穴の中へつれて入りました。穴の中には、仲間らしい人がたくさんいま  
した。そして、自分たちは、この島の王さまの馬がかりで、馬を買いに、この牧場へ来て  
いるのだと言いました。

私に、おいしい食べ物を入れて、

「お前さんは、ほんとうに運うんがいい人だよ。もし、あした来たんだったら、もう私たちは  
帰ってしまったていたからね。道を教えてあげることが、できやしなかったんだよ。」  
と、言いました。

あくる朝早く、私たちは出しゅ立ったしました。そして都みやこにつきました。

王さまは私をよろこんで迎えてくださいました。私が出あつたさいなんの話をお聞きに  
なり、

「この者に、不自由をさせないように、気をつけてやれ。」  
と、家来けらいにお言いつけになりました。

さて、私は、大へん船がすきでしたから、そこにいる間、毎日のように、ほとばしり出かけて、ボートから荷物をおろすのを、見てくらししました。

ある日のこと、いつものように、あちこちの船につんである、荷物をながめていました時、その中に、私の名を書いたこうりが、たくさんつんであるのを見つけました。それで、すぐに、その船長のところへ行つて、そのこうりの持主もちぬしはだれです、と聞いてみました。すると船長は、

「ああ、それはね、バクダッドの商人の、シンドバッドという人のです。その人は、航海に出るとまもなく、むごたらしい死に方をなすつたのです。ある時、この船に乗っていた人たちが、ねむっていた大きなくじらの背中を、草のはえている島だと思って、その上に乗つたのです。そして、たき火をしました。すると、熱いので、くじらが目をさまして、いきなり海へ沈しずんでしまつたのです。それで、たくさん人が死にました。その中にシンドバッドさんもいたのです。そういうわけですからね、私はこの品物をすっかり売つて、お金にして、あの方の身内みうちとか、しんるいとかいう人でもあつたら、お渡ししたいと思つて

いるのです。」

と、話したのであります。

それで私は、

「船長、私とそのシンドバッドです。このこうりは、みんな私のです。」と、言いました。すると、船長は、急におそろしい顔をして、

「まあ、世の中はゆだんもすきもありやしない。おい、お前さんが何と言ったってね、私は、ちやあんこの目で、シンドバッドが海に沈んだところを見たのだけ。」と、どなりつけました。

私は、すぐに、あれから後のことを何もかも船長に話しました。ところへちやうど、船に乗っていた商人たちが出て来て、私をほんとうのシンドバッドだと言ってくれました。

船長は、はじめて、大そうよろこびました。そして、

「すぐに、荷物をお引き取りください。」と、言いました。

私はその中から、なるべく見事なものをえらび出して、王さまにさし上げました。それから、あとの品はみな売りはらって、びやくだんと、につけいと、しょうがと、はっかど、  
丁子香ちようじこうとを買い入れました。

それからもう一度、この船長の船に乗って出かけました。

その帰りみち、私はある島で、持って来た香料こうりょうをみんな、大へん高く売ることができました。それで、いよいよバクダッドへ上る時には、一万円の金貨ができていました。

家の者たちは、私が帰って来たので、大へんよろこびました。

それから私は、少しばかりの土地を買って、小ざっぱりした家を立てました。そして、安楽あんらくにくらして、こわい目にあつたことは、みんな忘れてしまおうとしました。

ここで、シンドバッドは、一番はじめの航海の話を終りました。そして、音楽をはじめるように、また、もつとごちそうを持って来るように、と言いつけました。

さて、それがすんだ時、シンドバッドは、金貨で百円ほどを、シンドバッドにくれました。そして、もしも二度めの航海の話が聞きたかったら、あすの晩の、今時分にまたおいで、と言いました。

シンドバッドは、大いそぎで、自分の家へ帰って行きました。

皆さん、その夜、まあどんなにシンドバッドのおかみさんや、子供たちがよろこんだか、お察さつしてください。

さて次の晩、ヒンドバッドは、一番いい着物を着て、シンドバッドの家へ行きました。ゆうべと同じように、大そうなごちそうが出ました。そして、それがすんだ時、「皆さん。今晚は、二度めの航海の話をしようと思います。これは、ゆうべの話よりもっともつとふしぎなことがたくさんあります。」と、シンドバッドが申しました。

### 二度めどの航海こうかいの話はなし

家へ帰って、しばらくの間は、私も楽しくくらしていました。しかし、まもなく、私は、ぶらぶらとその日その日をおくることが、いやになりました。そして、海の上へ乗り出して、波の上をとぶように走ったり、帆づなをびゅうびゅうならせて吹いてゆく、風の音を聞いたりしたくて、たまらなくなりました。

そこで私は、いそいでいろいろの品物を買いつめ、もう一度、外国へ商しょうばい売ばいに出かけることにしました。

それから、つごうのよさそうな船に乗って、大勢の商人たちと一しよに、いよいよ二度めの航海に出かけました。

船は、みちみち、いろんな港につきました。私どもは、そのたんびに、持って来た品物  
を売って、大そうもうけました。そして、すっかり品物を売りはらってしまってから後の  
ことでした。ある日のこと、私たちは、ある島につきました。

その島は、ほんとうに美しい島でした。エデンの園そのかと思われるほど、きれいなところ  
でした。たくさんの花が、にじのように咲きみだれて、じゆくした果物が、おいしそうに  
ふさになって、なっていました。

私は、まずこの木の下へどつかりとすわりました。そして、あたりを見まわしました。  
そこら一面、見れば見るほど、美しゆうございました。私は、持って来た食べ物をたべ  
たり、お酒を飲んだりしました。それから目をつぶりました。そばを、しずかに流れてい  
る、小川の流れの音が、歌のように聞えてきました。そのうちに、ぼーつとしてきて、私  
はねむってしまいました。

それから、いったい、どれだけ時間がたったのかわかりませんが、ふと目をさますと、  
一しよに来た人たちは、一人もいなくなっていました。びっくりして、海の方へさがしに  
行ってみますと、まあ、どうでしょう。船は、とっくに出てしまっているではありません  
か。そして、はるか向うまで走って行って、ちょうど白い点を打ったように見えるだけで

あります。私は、この島におき去りにされてしまったのです。こんなことになるほどなら、どうしてあのまま、家にじつとしていかなかったのかと、泣いて残念ざんねんがりましたけれど、仕方がありませんでした。

私は、どうにかして島から出て行くことはできないものかと思って、高い木にのぼって、方々を見まわしました。

はじめに海の方を見ました。けれども、海には何にもありませんでした。

それで、こんどは、陸おかの方を見ました。すると、島のまん中ほどに、大きな、白い、円まる屋根のようなものが見えました。今まで一ぺんも、そんなものを見たことがないので、それが何だか、ちつともわかりませんでした。

私は、ともかく、木からおりました。そして、大いそぎで、その白い円屋根の方へ走って行きました。

しかし、いよいよそばまで行っても、それはかいもく何だかわかりませんでした。ちょうど大きなまりのようで、すべすべしていて、とても、よじのぼることなどできませんでした。また、それかといつて、中へ入って行こうにも、戸らしいものや、入口らしいものが、一つもありませんでした。どうにもしようがないので、私はただ、ぐるぐるそのまわ

りをまわっていました。

すると、にわかには空がくもってきて、見る見る夜のように、まっ暗になってしまいました。

それで、おそろおそろ空を見上げますと、大きな鳥がまいおりて来て、そのつばさのかけのために、こんなになったのだということがわかりました。鳥は、またたくまにおりて来て、白い円屋根の上へとまりました。

この時、ふと私は思い出したことがありました。それは、水夫たちに聞いていた、ロツクという鳥のことです。それで、すべすべした円いまりは、その鳥の卵にちがいないと思います。

こう思いつくと、すぐに私は、頭にまいていた布をといて、つなを作りました。そして、それを自分の腰のまわりにまわして、両方のはしを、しっかりとロツクの足にむすびつけました。

「しめたぞ。この鳥は、今に、とび上るにちがいない。そして、きつと、私をこの鳥から、つれ出してくれるにちがいない。」私は、こうひとりごとを言って、よろこびました。

はたして、まもなく、私は地から持ち上げられました。そして、雲にとどくかと思うま

で高くのぼってしまいました。それからまた、だんだん下へおりてゆきました。そして、地につきました。私は手早く、ずきんの布をときました。そしてロックからはなれました。

ロックにくらべると、私はお話にならないほど、小さいものでした。それでロックは、まるきり私に気がつかなかったらしいのです。ロックはすぐに、そばに寝ねていた大きな黒いものの方へとびかかってゆきました。そして、それを口ばしでくわえて、とび上ってしまいました。

皆さん、それから私が、つくづく、ほかにもたくさん寝ていた黒いものを見た時、まあ、どんなにおどろいたか、お察しく下さい。それはみんな、黒い大きな蛇へびだったので。なお、よくよくあたりを見ますと、ここは、岩のかさなりあつた、深い谷底でした。どちらを向いても、びょうぶのようにけわしい山が、そびえていました。そして、岩の間には、このおそろしい蛇よりほか何にもいませんでした。

「ああ、こんなことなら、いつそあの島にいた方が、ましだった。わざわざ、もつとひどい目にあうために、この島へ来たようなものだ。」と、私は泣き泣き、ひとりごとを言いました。

そして、じつと岩を見つめていますと、何だか、きらきらとよく光る石が、そこら一面

にちらばっているではありませんか。ふしぎだなと思って、ずっとよって見ると、それがみんな、大へん大きなダイヤモンドでありました。ちようど小石くらいの大きさのものです。私は、とび上るほどよろこびました。

しかし、すぐに、おそろしい蛇が、私にかみつこうとして、ねらっているのに気がつきましたから、そのよろこびはどこへやら、背中にぞつときむけがたちました。

蛇は、どれもこれも、大そう大きなものでした。象ぞうでも、一口にのみそうなものばかりです。昼間はロツクがこわいので、じつとしていても、夜になると、のたりのたりとはいまわって、食べ物やさぐすのでした。

私は、日がくれないうちに、岩の中の穴を見つけて、その中にしゃがんで、ふるえながら夜のあけるのを待ちました。そして朝になつてから、もう一度、谷へ出て行きました。さて、これからいったい、どうしたらいいのだろうと、じつとすわって考えていますと、ちようど目の前へ、ころころと大きな生なまの肉のきれが、ころがって落ちてきました。それからまた、同じようなのが落ちてきました。そして、次から次と落ちてきて、見る見るもり上ってしまいました。

この時、私はふと、ある旅行家りょこうかから聞いた、ダイヤモンド谷の話の思い出しました。

それは、毎年わしが卵をかえす時分になると、商人たちが、高い山へのぼって行って、生の肉のきれを、谷底をめぐがけてころがし落すのでした。すると、谷にちらばっているダイヤモンドが、その肉の中へ、はまりこみます。その肉を、わしがひなにやるために、くわえて帰って来るのです。商人たちは、そこを待ちかまえていて、わしを巢すから追い出して、肉の中のダイヤモンドをとるといふ話であります。

やがて、わしがまいさがって来て、肉のきれをくわえて、とび上ってゆきました。それを見ているうちに、ふとある考えが浮かびました。それで、とてもだめだと思つてしよげていた私は、元氣を出しました。

そこで、まずあたりをさがしまわって、なるべく大きそうなダイヤモンドを拾って、ポケットにつめこみました。それからまた、肉の一ばん大きなきれを見つけて、それを、あらずきんで作ったつなで、からだへしつかりと、むすびつけました。わしがまたすぐに、えものを取りにおりて来るだろうと思つたからです。それから、肉のきれの下にもぐって、地面の上へねそべりました。そして、どうなることかと、じつと待つていました。

するとまもなく、わしが、すうーつとおりに来ました。そして、私のからだにむすばれてあつた肉をつかんで、さつととび上りました。そして、高い高い山の上の、岩の間の巢

の中へ、私を落しこみました。

すると、思った通り、すぐに岩の後うしろから人が出て来て、大きな声でわしを追いたてました。わしは、びっくりして、そのままとび去ってしまいました。

この人は、この巢の番をしている商人で、肉の中のダイヤモンドをさがしに来たのでありましたが、私を見て、びっくりして、後へとびのきました。けれども、すぐに、

「お前さんはここで何をしているんだ。ああわかった。ダイヤモンドをぬすみに来たんだな。」

と、おこりつけました。

しかし、私は、落ちついて、

「まあ、お待ちください。私はけつして、どろぼうではありません。私の話をお聞きになったら、きつと私を、気の毒に思ってくださいるでしょう。そして、きつとおとがめにはならないでしょう。それから、お望のぞみのダイヤモンドなら、ここに少し持って来ましたから。」と、言いました。

そこへ、ほかの番をしている商人たちもやって来ました。私はみんなに、今までの、あぶない目にあつた話をして聞かせました。商人たちは、私の勇気と、そんなあぶない目か

らうまくのがれたちえとに、びっくりして、ただただ目を見はっているばかりでした。

それから私は、手にいっばいダイヤモンドをつかみ出しました。そして、みんなに見せました。みんなは、そんなりっぱなダイヤモンドを見たのは、はじめてのようでした。

「さあ、がっかりなさったかわりに、どれか一つお取りください。」

と、どなりつけた商人に言いました。

すると、その人は

「では、この小さいのを一ついただきますしよう。」と、言って、きらきら光っている中から、一ばん小さいのを一つ取り出しました。

私は、もつと大きいのをお取りなさい、とすすめましたが、その人は首くびをふって、

「これ一つあつたら、私がほしいと思った財産をつくることができます。私はもう、こんなあぶない思いをして、ダイヤモンドをさがしには来ますまい。」と、言いました。

それから、みんなで、港をさして出かけました。そして、そこから船に乗って、家へ帰ることにしました。帰りみちでも、いろいろあぶない目にあいました。けれども、ともかく、バクダッドへ帰って来ることができました。

私はダイヤモンドを売って、大へんなお金をもうけました。そして、たくさんのお金を

貧乏人にほどこしました。そして前よりも、もっとお金持になって、人からちやほやされるようになりました。

ここで、シンドバッドは話をやめました。そして、また百円、シンドバッドにくれました。それからシンドバッドは家へ帰って行きました。

次の日の晩も、また、お客さまたちはあつまりました。シンドバッドも、やつぱりやって来ました。

シンドバッドは、また、あぶない目にあつた話をしはじめました。すなわち、三度めの航海の話でありました。

### 三度めの航海の話

私は、しばらく家にいて、楽しくくらししているうちに、だんだん、苦しかったことや、こわかったことを、忘れてゆきました。そしてまた、新しいぼうけんがしてみたくなりました。それに、まだ私は、家でしづかにして、ぶらぶらくらししている年ではない、と思い

ました。それでこの前の時のように、品物を買ひあつめて、商売の旅たびに出ました。

商売は、どの港でも、大へんつごうよくゆきました。品物がどんだん売れてゆきました。そして、こんどこそは、ひどい目にもあわないですみそうだと思つているやさき、ある日、大あらしがやつて来ました。

船は、すっかり方向がわからなくなつてしまつて、船長でさえも、風下かざしものある島のかげへ来るまでは、どこをどう進んでいるのか、かいてもわからないというほどでした。

仕方がないので、私どもはともかくも、その島のかげで、あらしをよけるために、いかりをおろしました。

けれども、船長が、この島をつくづくと見た時、急にかみの毛を引きむしつて、

「しまった、ここは猿さるの山にちがいない。」と、さけんだのであります。

それから船長は、この島へ来て、生きて帰つた者はないのだ、という話をしました。なぜかという、この島には、人よりも猿によく似たものがたくさん住んでいて、おまけに大そう、けんかずきだということです。

船長のこの話が終らないうちに、もう小さなやつが大勢、海岸へ出て来たかと思うと、船をめぐけて、ほちやほちやと泳およいで来はじめました。

それが近づいて来た時、よくよく見ると、一寸法師ほんしのようで、猿よりもにくりしいのです。そして、からだじゅうに赤い毛が、ぎつしりはえていました。

やがて船に泳ぎつくと、みんなして船を海岸へ引っぱって行きました。そして、私どもを陸おかに追い上げて、こんどは自分たちばかりが船に乗って、ほかの島をさして、こいで行きました。

私どもは、こわごわ、そこらじゅうを歩いてみました。そして、果物や木の根を見つけ、たべました。

夕方になってから、向うに高い御殿が立っているのが、見つかりました。それで、そこにかくれるところがあるかもしれないと思つて、行つてみることにしました。

御殿には、こくたんの大きな戸が閉まっていました。おすと、すぐに開きました。私どもは、中庭へ入って行きました。だれもいないで、ひっそりしていました。

しかし、しばらく見まわっているうちに、骨ほねを小山のように積みかさねてあるところへ来ました。そこには、物を焼く時に使うかなぐしが、いっぱいちらばっていました。

わけがわからないものですから、私たちは、だいぶ長い間、じつとそれを見ていました。すると、太い、雷かみなりのような音が聞えてきました。みんなが、その方をふり向くと、ちよう

ど、こくたんの戸がそろそろと開きかかっていると、くれないと金を  
 まげたような夕やけの空の中に、ぬうーつとあらわれたのは、おそろしい  
 大入道おおにゆうどうでし  
 た。

その大入道は、松やにのようになつ黒な色をしていて、しゅろの木のように背が高いの  
 です。ひたいのまん中に、一つ、まつ赤かな目がありました。それはちようど、石炭がもえ  
 ている時のように、ぎらぎら光っていました。口は、まつ暗な井戸のようで、くちびるは、  
 らくだのように胸までぶらさがっていました。そして、耳は象のように大きくて、肩のへ  
 んまでたれていました。また爪つめは、わしのようにとがっていました。

私どもは、この大入道を一目見るやいなや、気をうしなつて、そのままそこにたおれて  
 しまいました。

やがて、息いきをふき返してみると、大入道は、私たちを一人ずつ、つまみ上げて、そのま  
 つ赤な目で、ていねいにしらべているところでした。

すぐに私がつまみ上げられました。私は、高いところで、ぶらんぶらんしていました。  
 大入道は、ぐるぐる私をまわしながら、からだの方々をつねってみるのです。太っている  
 かどうか、こうしてしらべるのです。やがて、私が骨と皮ばかりにやせているのがわか

ると、下へぽーんと投げました。それから、また、仲間の一人をつまみ上げました。この人も、くるくるまわされたり、つねられたりして、苦しそうでした。その次には船長をつまみ上げました。この人は、みんなの中では、一ばん太っている人です。大入道は、にやりと笑って、船長をかなぐしに、ぷすりとさしこみました。そして焼きはじめました。それから船長を、夕ごはんにしてたべてしまうと、ぐうぐうねむりはじめました。そのいびきは、一晚じゅう、雷がごろごろ鳴りひびいているようでした。

そして朝になると、私たちには目もくれないで、さつさと出かけて行きました。

すぐに、私どもは、よりあつまって、自分たちの不運ふうんを悲しみあいました。そして、どこかほかに、かくれ場をさがそうと思つて、御殿を出て行きました。

しかし、島じゅうどこにも、そんなところはありませんでした。

夜になつて、仕方なく、また御殿へ歸つて来ました。

すると、まもなく大入道も、外から歸つて来て、また仲間の一人をつかまえて、きのうの船長と同じようにして、たべてしまいました。

次の朝、大入道が出かけて行つた後、私どももやつぱり、出かけました。こんどは、もう一度この御殿へ、たばられに歸つて来るくらいなら、いつそ海へ身を投げて、死ぬけっし決

心でした。

それから、方々ががしても、やつぱりどこにも、かくれ場はありませんでした。そして、出るともなく海岸へ出てしまいました。すると、仲間の一人が、

「私たちは、もう神さまに見はなされてしまったのです。あんなにして、一人々々殺されてゆくよりも、いつそ、みんな一しよに死んでしまおうじゃありませんか。」

と、言いました。

「なるほど、それももつともです。しかしまあ皆さん、私の考えも、ひとつお聞きください。」

と、私はそれに答えてから、口をきりました。それから、

「このあたりに流れついている流木りゅうぼくを拾って、いかだを作りましょう。そして、もしもあの大入道を殺すことができなかつたら、それに乗って、にげたらよいじゃありませんか。いかがです。」

と、相談してみました。

すると、みんなこの話に、さんせいしてくれました。そして、夕方までにいかだを作り上げて、海岸につないでおきました。

さて、それから、帰りたくもない御殿へ、いやいやながら帰って行きました。きつと今晚も、だれかが殺されて、たばられてしまうにきまつていましたが。

大入道は、また一人を、いつものように夕ごはんにしてたべると、大いびきで寝てしまいました。そこで私どもは、しずかに、大きなかなぐしを二つ、取り上げました。そして、かっかつと石炭がもえている中へ、つつこみました。そして、それがまっ赤になるのを待つて、こつそりと大入道の寝ているそばへ、近よつて行きました。それから、みんなで力をあわせて、そのかなぐしを、大入道の目の中へつきさしました。

大入道は、おそろしいうなり声を立てて、痛<sup>いた</sup>いのと、腹が立つので、とび起きました。そして、うでをのばして、私どもをつかまえようとしました。けれども、もうめくらになつているものですから、私どもはうまくにげまわつて、すみの方にうつぶしになつていました。それで、とうとう一人も、つかまえられませんでした。

大入道は、わあわあ泣きながら、やつと、こくたんの戸のところまで行きました。そして、手さぐりで戸をあけて、まっ暗なやみの中へ消えていってしまいました。その泣き声<sup>が</sup>、いつまでもいつまでも、夜の空にごーごーと鳴りひびいていました。

私どもはすぐに、いかだをつないであつた海岸をさして、走つて行きました。そして、

そこで、大入道が死んでしまったのか、まだ生きているのかわかるまで、待つことにしました。

けれども、やつぱり、私たちは運が悪かったのです。夜があけてゆくにしたがつて、雷のような足音が聞えてきはじめました。それは、おこったあの大入道が、仲間を二人つれて来る足音でした。二人とも、さっきの大入道にまけずおとらずの、おそろしく背の高いやつでした。

私どもは、それを見るやいなや、大いそぎでいかだに乗りました。そして、沖へ向つてこぎ出しました。

すると、大入道たちは、岩を拾つては、いかだをめがけて、投げはじめました。そのため、私のいかだよりほかのいかだは、みんな海に沈んでしまいました。

私のいかだには、ほかに二人の仲間が乗っていましたが、三人とも、どうしてもここからにげたいと思いました。それで、あるかぎりの力を出して、こぎました。それで、まもなく、ほかの島へつくことができたのです。

この島には、大そうおいしい果物がありました。私どもは、たべたり、休んだりして、しばらくつかれをなおしていました。

するとにわかには、ぎーぎーと、おそろしいひびきが聞えてきました。そして私も、何だか急に気分が悪くなつてしまいました。仕方がないので、じつとしていますと、とても大きな蛇が、ぬうーつとはいよいよつて来ました。そして、あつというまに、仲間の一人をのんでしまいました。

「ああ、やつと一つのがれたと思えば、こんどは前よりも、もっと悪いことがやってくる。ほんとうに、どうしたらここからにげて行くことができるのだろう。」  
と言つて、私たちはなげきました。

それでも、助かつた二人は、走りつづけて、やつと高い木の下まで来ました。そして、大いそぎで、その木へのぼりました。

その木には、運よくも、果物がなつていました。そこで二人は、まずお腹なかをこしらえました。

その夜、私は、一ばん高い枝にのぼつていましたが、また蛇のぎーぎーいう音で目をさしました。すると、どうでしょう、蛇は、木にぐるぐるとまきついて、今にも、たった一人の私の仲間を、のもうとしているのです。そして、あつというまもなく、また大きな口をあけて、ペろりとのみこんでしまいました。

「ああ、こうなっちゃ、もうどうしたってだめだ。晩にのまれるのを、じっと待っているよりも、いつそ、がけの上から、海へとびこんで死んでしまおう。」

こう、私はひとりごとを言いました。

けれども、海べまで来てみますと、そんなことをするのは、あんまりいくじがなさすぎると考えたのであります。

そこでまた、引き返してきて、木の枝だの、あしだの、いばらだのを、できるかぎりあつめました。そして、それをたばにして、しっかりとゆわえ、それでもつめて、木の下に円い小屋のようなものを立てました。そして、そのてっぺんを、かたくかたくむすびあわせで、どこにも蛇が入って来るすきまがないように、ていねいに作り上げました。

さて、その晩も、おそろしいぎーぎーいう音が聞えてきました。けれども、蛇はただ、小屋のまわりを、ぐるぐるとすべりまわっているだけでした。私は、おそろしさのあまり、死んだ人のようになつて、ふるえながら夜をあかしました。

こうしてまた、私は助かりました。そして、海べへ出て行きました。こんどこそは、もう身を投げて死のうと、きめて行つたのです。あんなおそろしい目にあうのは、とてもがまんができないと思つたものですから。

しかし、ありがたいことには、海べに立つて、沖の方をながめてみますと、一その白帆らほの、こちらへ近づいて来るのが見えました。

私はずきんととつて、むちゆうになつてふりまわしました。するとまあ、なんてうれしいことでしょう、その船からはボートをおろしました。私を助けに来るのです。

まもなく、私はその船に乗ることができました。そして、いっさいの話をしました。だれもかれも、私をかわいそうに思つて、大そうしんせつにしてくれました。そして、新しい着物を出してきて、

「そのぼろぼろになつた着物と、お着かえなさい。」と、言つてくれる人もありました。そのほか、いろんなことをして、私をなぐさめてくれました。

そんなにして、航海をつづけているうちに、びやくだんの木が、いっぱいはえている島へつきました。そこで、いかりをおろして、商人たちは島の人たちと取引をするために、おか陸へ上つてゆきました。

そのあとで、船長が私を呼んで言うには、

「じつは、少しお願ひしたいことがあるのですが、聞いてくださいませんかでしょうか。ほかでもありません。まあ、このたくさんの荷物を見てください。これはみんな、この船に

乗っていたバクダツドの商人のものなのですが、気の毒なことには、その人を、ある島へ、おき去りにしてしまつたのです。それで私は、この荷物をみんな売りはらつて、そのお金を、その商人の家の人にあげたいと思つてはいるのですが、あなた、これを陸へ持つて上つて、売つてくださいませでしょうか。もちろん、分け前はさし上げるつもりなんです。」「とのことなのです。

そこで、私は、

「それは、けつこうなお考えです。だが、その商人の名前は、何というのでしたか。」と、聞いてみました。すると、船長は、

「シンドバッドというのです。」と、答えたではありませんか。

私は、こうりについている、私の名前をしらべてみました。それから、船長に、  
「その人は、ほんとうに死んだのですか。」と、聞きました。

船長は、

「それが気の毒なんです。とてもあの島では、助かっている見こみはありません。」と、答えました。そこで、私は船長の手をとつて、

「船長、私の顔をよーつくごらんください。あなたはこの顔に、おぼえはありませんか。」

私こそそのシンドバッドです。あのロックの島にとり残された、シンドバッドです。」  
と、言いました。そして船長に、いろいろこわい目にあつた話をして聞かせました。そのうちにだんだん、私がシンドバッドだということが、わかつてきました。そして、大よろこびで品物をみんなと、今までにほかの島で私の品物を買つてもうけたお金を、私に渡してくれました。

それからまもなく、私たちはバクダッドにつきました。私は、こんどの商売では、とてもかぞえきれないほど、お金をもうけていました。それで、もつと土地を買つて、またたくさんのお金を貧民どもにほどこしました。そしてまもなく、あぶなかつたことや、苦しかつたことを、みんな忘れてしまいました。

そこで、三度めの航海の話は終りました。

シンドバッドは、また、シンドバッドに百円やるようにと、召使に言いつけました。

それからまた、シンドバッドは、第四航海の話を聞きに来ました。

#### 四度めどの航海こうかいの話はなし

三度めの航海の後は、私は大へんゆたかに、仕合せにいらしていました。しかし、皆さん、あきれてはいけません。また私は、ただお金持で、ぼんやり家にいるのでは、どうも満足まんぞくがでなくなりました。旅をして、いろいろのぼうけんをしたいと思う心が、おさえなくても、おさえなくても、どうしてもやみませんでした。

私は、また、商品を買いたつめました。そして、仲間の商人と一しよに船に乗って、外国の港をさして、出かけました。

船は、いろいろの港につきました。私どもは、それぞれお金もうけをしました。

ところがある日、大あらしがやって来たのです。そして、船長でさえも、船をどうすることもできなくなっていました。

帆ほは風のためにぼろぼろにちぎられて、まるでリボンのようになってしまいました。波は、何べんも何べんも、かんぱんの上をあらって、そのうちに船は、とうとう沈みはじめました。

乗組員と、お客さまの大部分は、おぼれてしまいました。しかし、私ども二三人は、やっと板きれに、とりつくことができたのです。そして、一晩じゅう、おそろしい思いをし

ながら、波にただよっているうちに、ある島へ流れつきました。

「生きているより、死んだ方がましだった。」

そう思いながら、夜が ажけるまで、海岸にたおれていました。

やがて、朝になつてから、何かたべるものがほしくなつたので、島の奥おくの方へ歩いて行きました。大して歩きもしないうちに、まっ黒な、やばん人じんのむれに行きあいました。

このやばん人どもは、すぐに私たちをとりまいて、自分らの小屋の方へ、引っぱって行きました。そして、まずはじめに、食べ物をくれました。私の仲間は、それをががついてつてたべました。けれども私は、もともと用心ぶかいたちですから、たべるふうだけしておきました。なぜかと言いますと、どうもこのやばん人どもは、人間の肉をたべているらしく思われたからです。

でも、ほんとうに、たべないでよかつたのです。私の仲間は、食べ物をのみこむと、まもなく気をうしなつてしまいました。そして、やがて気がついた時は、もうすっかり気がいなくなっていました。

これはどう見ても、やばん人どもが、何かたくらんでいるのにちがいないと思いました。その次にまた、ごはんの上にやしの油をどつきりかけて、持って来しました。この時は、

「はーあ、こうして、みんなを太らせておいてから、たべるんだな。」と、わかりました。それとともに、私は大そうこわくなりました。それから、いよいよ何にもたべませんでした。それで、大へんやせてしまいました。だれだって、殺してたべようとは思わないほどに、なつてしまいました。

さて、ある日、年とつたやばん人が、ただ一人、番をしているきりで、みんな出て行つてしまったことがあります。それで、私はやすやすとぬけ出すことができずしました。

私は、できるかぎり大いそぎで、森の中へ走つて行きました。そしてそこで、七日ほどすごしました。

しかし、やがてまた走り出て、とうとう島のはんたいのかわへ行きつきました。

そこには、西洋人たちが、こしようを取りに来ていました。そして私を見て、大へんびつくりしました。それから私の話を聞いて、なおなお、おどろいてしまいました。

「あのやばん人どもは、だれだつて見つかりしだい、殺してたべてしまうのです。無事<sup>ぶじ</sup>にげ出して来たのは、きつとあなた一人でしょう。」と、言いました。

それから私を、自分たちの船に乗せて、その国へつれて行きました。そして、王さまのお目通りへ、つれて出ました。

それから、みんなは、なかなかしんせつにしてくれました。

王さまも、とくべつにお取立てくださって、高い位くらゐにつけてくださいました。

さて、その島は、大へんお金のたくさんある島でした。そして、都みやこでは、さかんに商売が行われていました。私も、すぐに仕合せになつて、満足していました。

しかし、この島で、おどろいたことには、だれもかれも、馬によく乗るのですけれど、くらやあぶみや、たづなを使う者がありません。それで、ある日、私は王さまに、

「陛下へいか、なぜ、この国では、くらをつける人がないのでございますか。」  
と、うかがってみました。

すると王さまは、ふしぎそうな顔をなすつて、

「何を言つてるのかね。わしはまだ、そんな言葉を聞いたことがないよ。」  
と、おっしゃつたのです。

そこで私は、なめし皮を作る職しよくにんの人の中から、りこうそうなのを一人つれて来て、りつぱなくらを作ることを教えました。そして、私もまた、あぶみだの、はくしやだの、たづなだのを作りました。そして、これらがみんな出来上つてから、そろえて王さまにさし上げました。そして、どういふふうに使ふということもお教えしました。

すると、すぐに王さまは、それをお使いになつて、大そうおよろこびになりました。

また、それを見て、身分の高い人たちは、だれもかれもほしがりました。それで、私はまた、みんなに作つてやりました。

さて、そのうちに、私は、この島でも指おりの金持になつてゆきました。

王さまは、とうとう私に、この島の美しい娘と結けっこん婚をして、この島の人間になつてしまふように、とおつしやいました。

私は、その美しい娘というを見ました。すると、王さまのご命令通りにしたくなりました。それから二人は、一しよに仲よくくらしてゆきました。私は、そろそろバクダツドのことを忘れはじめました。

しかし、ある日のことでした。大へんなことが起つてしまいました。というのは、私がふだん仲よくしていた、近所のおかみさんが死んだのです。大へん気の毒に思ったものですから、すぐおくやみに行きました。そして、

「あんまりくよくよなさらないように。おかみさんはああして、早くおなくなりなすつても、そのかわりにあなたが、長生きがおできになりましようよ。」と、言いました。

その人は、うつむいたまま、じつと私の言うのを聞いていましたが、やがて、

「よしてください。どうして、あなたは、私から長生きができるなんて、おつしやるのです。私はもう二三時間したら、家内かないと一しよに、うずめられてしまう身じゃありませんか。……ああ、あなたはまだ、この国のおきてをご存じなかつたのですね。ここでは、妻つまが死んだら、夫はそれと一しよにうずめられるのです。そしてもし、夫の方が先に死ねば、妻がそれと一しよにうずめられるのです。」

と、言うではありませんか。

「まあ、なんておそろしいことだろう。そんなことは、とてもほんとうとは思われぬ。」

私は、それを聞いて、こうさげびました。

それから、王さまに、このことをうかがいました。すると王さまは、ただそれは、この国のおきてなんだから、そうされるのだ、とおつしやったきりでした。

それから、だれに聞いても、これをふしぎに思っている人はありませんでした。

まあなんてこわいことだろう、なんていやなことだろう、と思っっているうちに、とうとうそれが、私の身の上にふりかかってきました。ある日のこと、私の妻が、病気になったのです。そして、わずかのわずらいの後、とうとう死んでしまったのです。

すると、町の人がやって来て、妻に一番いい着物を着せました。そして、髪かみには宝石を

かざりました。それから、高い山の上へ運んで行きました。

山の上には、石が一つおいてありました。その石を持ち上げると、下は深い深い穴になっていました。そしてその中へ、私の妻は落されてしまいました。

私は、どうか助けてくださいと、ずいぶんたのみました。しかし、だれも、私が何を言っているのか、聞こうともしませんでした。せつせと、小さいパンを七つと、水さしにいつぱいの水とを用意していました。そして、それを私に持たせて、穴の中へつき落とし、石のふたをしてしまいました。

私はたった一人、暗い穴の中に、とじこめられてしまったのです。しばらくの間は、泣くにも泣かれませんでした。

それから七日の間は、ともかくも、少しながらもパンと水がありましたから、生きていくことができました。しかし、それもとうとうなくなってしまった時、私は、いよいよ死ぬのだなと思いました。

その時、急に、ほら穴の向うがわに、何か生きてきた物がとびこんで来たのが、目に入りました。そして、その小さな、ねずみ色をしたものが、私の前をびよんとんで行きました。私は、はっと立ち上りました。そして、そのあとを追いました。すると、まもなくそれ

が、岩のわれ目の中へ入って行きました。私もまた、思いきって、その中へとびこみました。中は大へん、きゆうくつでした。おしつぶされるような思いをしながら、なおもそのあとをつけて行きました。そして、これは、ずいぶん来たもんだな、と思った時でした。気持のいい海の風が、熱あつくなっていた私のほおに、さつと吹いてきたのです。まもなく私は、ほら穴からぬけ出すことができました。そこは、青々とした空の下の海べでした。

私がついて来た、小さなものは、きつと、この道から入ったのでしよう。それで、出る時、私に道案あんない内ないをしてくれたようなものでした。

それからまた、私は勇気を起して、もと来た道へ引き返しました。そして、ほら穴の中にちらばっていた、宝石を拾いあつめ、それを、こうりにつめて、また海べへ出て来ました。そして船が来るのを待つことにしました。

一日じゆう私は、じつと沖を見つめていました。

やっと次の朝になって、うれしや、とうとう一その船を見つめることができました。

私は、さつそく、ずきんをといてふりました。それから、大きな声で呼びました。すると、まもなく、ボートがおろされて、私の方へこいで来ました。

「どうして、こんなところへ、いらつしやつたのです。私たちはまだ、ここの海岸に人が

いたのを、見たことがありますよ。」

と、ボートの水夫たちが言いました。

その時、私はどうしても、墓はかあな穴から出て来たのだとは、言うことができませんでした。もしも、もとのところへつれ返されたら、大へんだと思ったものですから。……それで、

「二三日前、難船なんせんして、やつと、このこうりだけ持って上ったのです。」と、言っておきました。

つごうのいいことには、水夫たちは、もう何にも問いませんでした。そして、すぐにボートをこぎ出して、私を本船へつれて行ってくれました。

こんなふうにして、また無事に帰って来ました。もちろん、前よりも一そう金持になりました。そして、あんなおそろしい目にあっても、助かったとは、まあなんてありがたいことだろう、と思ったのであります。

ここで、シンドバッドはやめました。そして、ヒンドバッドは、また百円もらい、またあすの晩も来るように、その時は五度めの航海の話をするから、と言われました。

五度めの航海ごうかいの話はなし

さあ、これから、五度めの航海の話をはじめようと思います。（あくる晩、みんながテーブルのまわりに腰をかけた時、シンドバッドは、こう口をきりました。）

ご存じのように、今まで、ずいぶんひどい目にあつていながら、私のぼうけんずきは、やっぱりやみませんでした。家の中にじつとしていることがじれったくて、またまた、海へ行きたくてたまらなくなりました。

そして、こんどは、ひとの船に乗らないで、自分の船を作りました。そうすれば、どこへだって、行きたいと思うところへ行けますし、したがって、したいと思うことをやって、商売ができるわけです。

さてこの船は、かなり大きゆうございましたので、ほかに五六人の商人も乗りこんでもらいました。そしてまた、海へ乗り出しました。

それから、五つ六つの港へつきました。商売は、とんとんびようしにはこびました。

するうち、ある日のこと、ふしぎな白い円屋根のある、沙漠さばくのような島へ来ました。私はすぐに、ははあ、ロックの卵だなど思いました。しかし、ほかの人は、まだ、だれも見

たことがないというのです。そして、ぜひ見てゆきたいから、上らせてくれというのです。仕方がないので、ゆるしました。

その人たちは、近づいて行って、ふしぎそうに見ていました。ちょうどその時は、ロツクのひなが今にもかえりそうになっていた時で、少し口ばしで、からを破ろうとしておりました。

すると商人たちは、私がとめるのも聞かないで、この卵をこわしてしまいました。そして、ひなのロツクを引き出して、りょうりをしはじめました。私は、そんなことをすると、きつとあとでこわい目にあうにちがいないから、およしなさい、およしなさい、と言つてとめました。しかし商人たちは、かまわずどんどん、いろんなごちそうに作っていました。すると、それからすぐでした。急に空がまつ暗になって、あのロツクの大きな黒いつばさが、私どもの頭の上へおおいかぶさつてきました。

私たちは命からがら船へ帰りました。船長は、さつそく船を出しました。親鳥が大へんおこつているということが、わかりましたから。

おそろしい大きな鳥は、すぐに海の上へ追っかけて来ました。空は見る見るまつ暗になつてしまいました。見上げると、大きなつばさがぴゅーんぴゅーんと風をきっています。

とがった爪の間には、大きな石を、いくつもいくつも持っていました。それは石というよりも、岩と言いたいくらい大きなものです。

船のま上へ来た時、持っていた石を一つ落しました。石はびゅーつとうなりを立てて落ちて来ました。さいわい、それは船にはあたりませんでした。すぐ近くの海がまつ二つにさけて、船のまわりには、海の底そこの砂のまじった波が、まるでかべのように立ち上りました。

やれうれしやと思つて、上を見上げると、まあどうしましょう、もう一羽、ロックがやつて来ているのです。そして、しっかりとねらいを定めて、今にも石を落そうとしているのです。

ああ、とうとう船はだめでした。みじんにくだかれてしまいました。つぶされて死ななかつたものは、海の中へほうり出されて、波のまにまに沈んでゆきました。

しかし、運のいいことには、私は、浮いていた板にとりつくことができず。そして、足をぶらぶらさせているうち、ある島へつきました。

ほんとうに全く、この島にこそは、私はおどろいてしまいました。きっと、世界で一ばん美しい島だろうと思います。

今まで、たべたこともないような、おいしい果物や、それはそれは美しい花が、そこら一面にあつて、きれいな小川が、さらさらと流れていました。

私は、これまでのおそろしさも、つかれも忘れてしまつて、涼しい木かげに休みました。あくる朝、散歩かたがた、果物を取りに出かけました。そして、何だかあわれに見えるおじいさんが、小川つつみに、じつとすわっているのに会いました。その人は、大そう年をとつていらしいのです。そして、さもさも弱っているようでした。私は大へんかわいそうになつてしまいました。それで、

「もしもし、ここで何をしていらつしやるのですか。難船でもなすつたのですか。」  
と、聞いてみました。

けれども、そのおじいさんは、悲しそうに首をふつただけでした。そして、この小川を渡らせてくれと、手まねでたのみました。

私は、きげんよく、よろしいと言つて、しゃがんで、その人を肩ぐるまにのせました。おじいさんは、思つたよりも重うございました。

私は小川を渡りました。それから、その人をおろそうとしました。するとどうでしょう、おじいさんは、おりようとはしないで、両方の足でますます私の首を強くしめていくので

す。私は息がいきできなくなりました。そしてとうとう、あつと言ったきり気をうしなつてしまいました。

それからしばらくして、気がつきましたけれど、やつぱりおじいさんは、私の肩にまたがつていました。そして、やせてとがったそのひぎで、私をうんうんつきはじめました。それがとても痛いのです。私はたまらなくなつて、起きて、また歩きはじめました。そして、その人が行けという方へ行くよりほか、どうにもしようがありませんでした。

それよりは、毎日々々、口では言えないほどの苦しみをしました。一分間も、へんなおじいさんは、私の肩からおりようとしないのです。私が寝ている時でも、そうなのです。そして、はじめのように、とがったひぎで、うんうん私については、おっ立ててゆくのです。そして、自分はしよつちゆう、果物を取つてたべているのです。私も、もとより取つてたべました。そうしなければ、お腹なかがすいて、死んでしまいですからね。

さて、ある日のこと、私どもは、大へんたくさんひようたんがなつてるところへ来ました。そして、そのうちにたつた一つ、中がからになつて、ひぼしになつてひようたんがありました。私はそれをとつて、その中へ、ぶどうの汁しるをしぼりこみました。そして、日のよくあたりそうなところへ、ぶらさげておきました。

それからまた、あちらこちらと歩きまわって、四五日たつてから、ひょうたんのところへ行ってみますと、どうでしょう、おいしいおいしい、ぶどう酒しゅができているではありませんか。

私は、大よろこびで、ぎゅうぎゅう飲みました。すると、急に元気が出てきて、何だかうれしくなりました。そして、思わず歌をうたったり、おどったりしました。

肩にいたおじいさんは、びつくりしてしまいました。そして、手まねで、自分にも飲ませてくれ、と言いました。私は仕方がないので、ひょうたんを渡しました。

そのひょうたんは、大へん大きなものでした。それで、お酒もずいぶん入っていたわけです。おじいさんは、それを一しずくも残さないまで、飲んでしまいました。それから、へんな声で、何かしやべりはじめました。そして、しだいに、足をゆるめてゆきました。

私は、この時とばかり、うんと力をこめて、おじいさんを、地面の上へほうり出しました。おじいさんは、投げ出されたまんま、起き上ろうともしませんでした。

私は、やつと重荷おもをおろして、せいせいしました。そして、にこにこしながら、海べの方へ歩いて行きました。

ちようど海へには、五六人の水夫が、たるを持って、水をくみに上つて来たところでした。

た。私を見て目をまるくしながら、

「お前さん、こんな島へ、何をしに来たんだね。」こうたずねました。

私は、船がこわれてからの、いちぶしじゆうを話しました。すると、その人たちは、ますますおどろいてしまいました。そして、

「そんなあぶない目にあっても、助かったなんて、まあ、なんてお前さんは、運のいい人なんだろう。だが、その肩にのつかってたというおじいさんはね、海じじいと言って、そいつにつかまったが最後、助かりっこはないんだよ。」

と、言いました。それから、私を船へつれて行きました。

そのうち、船は大きな港につきました。その港の町の家は、みんな石で作ってありました。

そこで、今まで大へんしんせつにしてくれた一人の商人が、私に、みんなと一しよに、やしの実を取りに行かないか、とすすめました。そして、

「これをお持ちなさい。」と言って、大きな袋ふくろを渡しました。それから、

「けつして、みんなにはぐれて、かってなところへ行っちゃいけませんよ。みんながするようにするんですよ。」と、言いました。

さて、それから私たちは、ずいぶん遠い、やしの木の森へ行きました。

やしの木は、大そう背が高く、まつすぐで、おまけに幹みきがすべすべしていました。私は、これでは、とてもおぼれないだろうと思えました。そして、いったいどうして、実をとるのだろうか、待っていました。

それから、みんなは、うんとやしの木のそばへ近づきました。その時、私は、木の枝に、猿さるがたくさんのぼっているのに、気がつきました。そして、その猿は、私たちを見つめるが早いか、ぐんぐん上の方へのぼってゆきました。すると、みんなは一せいに、この猿に向って、石を拾っては投げ、拾っては投げはじめました。

私は、ずいぶんひどいことをすると思えました。それで、

「どうして、そんなことをするんです。猿は何にも、悪いことなんか、しやしないじゃありませんか。」と、聞きました。

しかし、すぐに、そのわけがわかりました。猿が、やしの実をもいで、どんどん、こちらへ投げはじめましたから。

私たちは、大いそぎで、そのやしの実を拾って、袋へ入れました。それから、またまた石を投げました。すると、猿も、ますます、やしの実を投げてよこしました。

みんなの袋がいつぱいになつてから、町へ帰りました。そして商人に売りました。

私は、それからまもなく、バクダッドへ帰つて来ました。帰りみち、方々の島へよつて、はつかだの、きやらの木だの、真珠だのを買いあつめました。

そして、家へ帰つてから、それらの品々を売りました。すると、どうして使つていいかわからないほど、たくさんのお金が、手に入りました。

ここで、シンドバッドは、ごちそうを持つて来るようにと、言いつけました。そして、シンドバッドが家へ帰る前に、また百円やるようにとも言いました。召使はその通りにしました。

次の夜、たくさんのお客さまと、荷かつぎのシンドバッドとが、いつものところへ腰をかけた時、シンドバッドは、六度めの航海の話をはじめました。

### 六度めの航海の話

こんどは、まる一年家にいました。その間、また航海に出るしたくをしていました。友と

達<sup>も</sup>や、しんるいの者<sup>たち</sup>たちは、行かせまいとして、いろんなことを言<sup>つ</sup>て、引きとめにかかりましたが、私はどうしても、しようちしませんでした。

まもなく、こんどは、うんと長い航海をするつもりで、出かけました。

けれども、この航海は、はじめから、つごうよくゆきませんでした。すぐに、ひどい大あらしにあつて、風のまにまに、あちらこちらと流されたあげく、とうとう、船長も、水<sup>み</sup>先<sup>ずき</sup>案内も、どこをどう走っているのか、だんだん、たよりなくなつてゆくばかりでした。すると、ある時のこと、にわか<sup>に</sup>に船長が、ずきんをぬぎ捨てたかと思うと、ぐんぐんかみの毛を引きむしつて、氣ちがい<sup>の</sup>ようになってしまいました。

みんなは、びつくりして、ばらばらつと、船長のそばへかけよつて行きました。

「どうしたんです、どうしたんです。氣をしつかり持つてください。」と、てんでに言いました。

すると船長は、

「もうだめです、もうだめです。船は、あぶない潮<sup>しほ</sup>の流れの中へ入つてしまいました。もう二三分したら、何もかも、みじんにく<sup>だけ</sup>てしまうでしょう。」と、言つたのでした。

全くでした。船長の言葉が終るか終らないうちに、船は、きみわるく、すうーつと走り

出したかと思うと、見る見る、けわしい山のすその、岩の折れかきになった海岸へ、どんとつきあたってしまいました。そして、粉<sup>こな</sup>みじんになってしまいました。

けれども、みんな、ふしぎに助かりまして、つんでいた荷物と、少しばかりの食べ物と一しよに、岩の上へ打ち上げられたのです。

海岸には、難破<sup>なんぼせん</sup>船のかけらと、まっ白になった骨とが、たくさんちらばっていました。船長は悲しげに、

「さあ、皆さん。死ぬ用意をしましょう。今までに、この海岸に打ち上げられて、助かった人はないのです。ごらんの通り、後はとてもおぼることのできない山ですし、また、助け船が来ることのできる場所でもありませんから。」と、言いました。

しかし、そうは言っても、食べ物をみんなに分けてくれました。ともかくも、生きていられるかぎりには、生きていた方がいいと思つたからでした。

さて、この島で私がおどろいたことは、大へんきれいな川が、山から流れ出ているのですが、それが、海へ流れ入らないで、海岸にそつて少し流れてから、また、山すその岩でできている、ほら穴の中へ流れこんでいることでありました。そして、そのほら穴の中をのぞいてみますと、その入口の岩は、宝石がはめこんであるように、たくさんきらきら光

っています。川底にもダイヤモンドだの、宝石だのが、ちらばっていました。それから、海岸の、どんなすみっこのようなところにも、難破船から打ち上げられた荷物が、ころがっていました。

さて、私の仲間は、食べ物がなくなるにしたがつて、一人々と死んでゆきました。それを私は、次から次とうずめてやりました。

そして、とうとう、私一人になってしまいました。私はもともと、何でも、ほんの少ししかたべないたちでしたから、それで私の食べ物が、一番おしまいまで残っていたのであります。

「ああ、悲しいことだ。私が死んだら、だれがうずめてくれるのか。ああ、どうしてもう、自分の国へ帰ることはできないのか。」

ある日のこと、そんなことを思いながら、川のふちを歩いていました。そして、岩穴の中へ流れこんでゆく水を、じつと見つめていました。そのうち、ふと、ある考えが浮かびました。

それは、この川は、一たんは山の中へ流れこんでいるけれど、きつと、またどこかへ流れ出ているにちがいない。そして、この川を下つてくだみたら、ひよつとしたら、助かること

ができるかもしれない、ということでした。

それから、急に元気が出てきて、海岸にちらばっている、木や板を拾って来て、丈夫ないかだを組みました。そして、たくさんのダイヤモンドだの、ルビーだの、難破船の荷物だのを、つみました。それから、忘れないで、少し残っていた食べ物もつみました。

そして、よくよく気をつけて、いかだを岸からはなしました。

すると、すうーつと気持よく走り出して、すぐに、まっ暗なほら穴の中へ入りました。

どンドンどンドン、私はそのまっ暗な中を流れてゆきました。川幅かわはばは、だんだんせまく

なつて、天じようも、しだいしだいに低くなつてゆきました。そして、頭をこつんこつんと打つて、だんだん苦しくなりました。それで私は、いかだの上へぺちやんこに、腹ばつてしまいました。

やがて食べ物も、とうとうみんなたべてしまいました。こんどこそ、いよいよ死ぬのだ、と私はあきらめました。そして、いつのまにか、ねむつてしまいました。

何時間も何時間も、そのままでしたらしいのです。何だか、がやがやいう声がするよう  
に思つて、私はふと、目を開きました。

ああ、その時、どんなによろこんでとび起きたか、お察してください。私の目に、青々と

した大空が入ったのです。川はしずかに、広々とした、たんぼの中を流れていました。

へんな声だと思ったのは、黒んぼがおおせい大勢よつてたかつて、私のいかだを、土手の方へ引っぱつていこうとしていたのです。

私には、黒んぼの言っていることが、ちつともわかりませんでした。しかし、その中にたった一人、アラビヤの言葉を話せる男がいました。それが、こう言うのです。

「まあ、しずかにしていらつしやい。……あなたはいつたい、だれですか。どこからいらつしたのですか。私もはこの国の者です。たんぼへ出て働いていますと、いかだが流れて来て、その上にあなたがねむつていらつしやるので、お助けしたのです。さあ、どうか、ここまでいらつしやつたわけを話してください。」

「ありがとう、いや、どうもありがとう。お話ししましょう。ですけれども、その前に、何かたべる物をくださいませんか。お腹がへって、声が出そうもないのです。」

黒んぼたちは、すぐに、食べ物を持って来てくれました。それで、私はやつと力がついて、気分もよくなりましたので、何もかも、くわしく話してやりました。

すると、みんなは、

「この人を、王さまのお目通りへ、つれて出よう。」と、口をそろえて言いました。

それから、私に、王さまはセレンジブさまというお名前で、世界じゆうで一番えらくて、一番の金持だと、話して聞かせました。

私は、よろこんで、ついて行くことにしました。もちろん、宝石などの入れてある、こりも持つて行きました。

セレンジブ王の御殿は、大へんりっぱなものでした。私は、まだ生れて一度も、あんなりっぱな御殿を見たことはありません。

王さまは、大そう私をいたわってくださいました。そして、私の申し上げる話を、大へんおもしろそうにお聞きになりました。

そして、私が、どうぞ自分の国へ帰らせてくださいませ、とお願ひしますと、すぐに、船を出すようにと、家来にお命じめいになりました。それから、ご自身で、バクダツドの王さまへあてて手紙をお書きになって、私には、りっぱなみやげ物をくださいました。

こんなにして私は、バクダツドへ帰つて来ることができたのであります。

そしてすぐに、カリフさまの御殿へ行つて、手紙と、セレンジブ王からいただいたみやげ物とを、さし上げました。

「まあ、このコップは、たった一つのルビーをくりぬいて、こしらえたものじゃないか。

おやおや中には、まあ、りっぱな宝石で、もようがかいてあるんだな。おや、これはまた、象ぞうでものみそうな、大きな蛇の皮じやないか。ああ、背中の紋もんがまるで、金のように光ってるな。これさえあれば、どんな病気だつてなおせる。」

こんなふうには、カリフさまは、手紙と、みやげ物を持って、大よろこびなさいました。それから、

「さあ、シンドバットや、セレンジブ王が、どんなにお金持で、どんなにりっぱであるか、話してごらん。」と、おっしゃいました。

私は、

「陛下、それは、とても私のつたない言葉では、申し上げることができないかと存じます。セレンジブ王は、いつも大きな象に乗っておいでになります。おそばには、金色の着物を着た千人の騎兵きへいが、つかえているのでございます。そして、王さまの金のほこには、エメラルドでかざりがついております。まあ、申してみれば、ソロモン王のような、くらしをあそばしていらつしやるとでも申しませうか。」

と、お答えしました。

王さまは、熱心にお聞きになりました。そして、私に、ごほうびをくださいました。

私は、家の者や、友達が待つているだろうと思つて、大いそぎで家へ帰りました。それから、持つて帰つた宝物を売つて、貧乏人にほどこしをしました。

その後は、しずかに、楽しい日をおくりましたので、今までの、おそろしかったことや、つらかつたことは、遠い昔のゆめではないかとさえ、思うようになりました。

これで、シンドバッドは、第六航海の話を終りました。そして、お客さまたちに、あしたの晩もまた来てください、と言いました。

あくる晩、また、お客さまが、みんなテーブルについて、ごちそうがすんだ時、シンドバッドは、いよいよ一番おしまいの航海の話をはじめました。

一番ばんおしまいの航海こうかいの話はなし

さて、六度めの航海の後には、私はもう、けつしてどこへも行くまいと、心にきめていました。もう、ぼうけんがしたいとも思いませんでした。

しかし、ある日、友達を呼びあつめて、ごちそうをしています時、召使の一人が入つて

来て、

「ただ今、カリフさまのお使がお見えになつて、だんなさまにお目にかかりたい、とおっしゃいますが。」と、言うのです。

私は、お使を通させて、さて、

「どういうご用でございましょうか。」と、聞きました。

するとお使は、

「カリフさまが、お召しでございます。すぐにおいでください。」と、言いました。

仕方がないので、私はすぐに御殿へ出かけました。そして、王さまの前に出ました。

「シンドバッドや、ひとつお前にたのみたいことがあるのだがね。それは、ほかでもない。わしは、セレンジブ王に、手紙と、おくり物とを、さし上げたいと思うのだが、お前、持っていくてくれまいか。」

と、王さまがおっしゃいました。

私は、はつと首をうなだれました。私の顔は、きつと、死んだ人のように、まっ青さおになつていたことでしょう。

「陛下、せつかく陛下のおたのみではございますが、私は、もうけつして、旅へは出まい

と、神さまにお約束しましたので。」

やつと、こうお答えしました。それから、ぽつりぽつりと、今まで六ペんの航海で出あった、いろいろなさまさまなぼうけんのお話をしました。

王さまは、びつくりなさいました。けれども、どうしても、この使にだけは行ってくれ、とおっしゃるのです。

おことわりがしきれなくなつて、私は「しようちしました。」と申し上げてしまいました。

カリフさまのお使の船は、バクダッドを出立しました。

それから、おだやかな航海をつづけた後、セレンジブの島へつきました。

町の人たちは、大よろこびで、<sup>むか</sup>迎えに来てくれました。

私は、さつそく御殿へうかがつて、役人に、私の来たわけを話しました。

役人は、私を御殿の中へつれて行きました。やがて私は、王さまの前に出ました。

王さまは、

「おお、シンドバッド、よく来てくれたね。わしは、あれからも時々お前のことを思い出して、もう一度会いたいと、思っていたんだよ。」

と、おつしやいました。

私は、カリフさまのお手紙と、見事なおくり物とを、さし上げました。

王さまは大へんおよろこびになりました。

二三日いた後、私は帰ることにしました。そして、自分の国をさして、船をいそがせました。けれども、またまた、帰りの船で、悪いことに出あってしまったのです。

ほかでもありません、私たちは海賊かいぞくにあつたのです。そして、船はとられるし、殺されなかつた者は、みんなどれいに売られてしまいました。

私もまた、ある金持の商人のところへ、どれいに売られてしまいました。

商人は、私を買つて帰つてから、

「お前は、職人かね。」と、聞きました。

「いいえ、商人です。」と、私は答えました。すると、

「では、矢を射ることができるかね。」と、聞きました。

それで私は、できます、と言いますと、商人は、私に弓と矢を渡して、大きな森へつれて行きました。それから、木へのぼれと言いました。そして、

「そこで、じつと番をしていて、象がやって来たら、射るのだよ。もし、うまくあつた

ら、すぐに知らせにおいで。」と言って、帰って行きました。

一晩じゆう、私は見はつていました。けれども、とうとう来ませんでした。

しかし、夜があけてから、とてもたくさんの象が、ぞろぞろとやって来ました。

そこで私は、矢つぎばやに、五六本、射てみました。

すると、大きな象が一ぴき、ごろりと地の上へたおれました。ほかの象はおどろいて、みんなにげて行きました。

私は、木からおりて、主人の商人のところへ、知らせに行きました。

それから、また主人のつれ立って帰って来て、大きな象を地にうずめ、そこにしるしをつけておきました。こうしておいて、あとで、きばを取りに来るのです。

その後、ずっと私は、この仕事ばかりさせられました。そのうち、またこわい目にあうことになりました。

ある晩のこと、象が、にげて行くと思いのほか、私ののぼっている木のまわりを、とりかこんで、大きな声でうなりながら、足ぶみをしはじめたのでした。それはまるで、大じんのようでした。そして、とうとう木の根を、引きちぎってしまいました。

木は、めりめりと大きな音を立てて、たおれてゆきました。私は、あまりのおそろしさ

に、気をうしなつてしまいました。

しかし、すぐに気がつきましたが、その時、象は、その鼻はなで私をぐるっとまいて、高く持ち上げ、ぴよんと背中のにせました。私は一生けんめいに、背中にかじりつききました。すると象は、私をのせたまま、歩き出しました。

やがて、森をぬけて、小山のふもとにつききました。この小山には、私はおどろいてしまいました。白くさらされた象の骨と、きばとで、うずまつているのです。

象は、しずかに、私を地の上へおろすと、どこかへ行つてしまいました。

私は、びっくりして、この象げの山を、しばらく見つめていました。そして、象がこんなにかしこいちえを持っているのに、感心したのでした。

象は、私をここへつれて来て、自分たちを殺さないでも、こんなにたくさん象げが取れるということ、教えるつもりだったのに、ちがいありません。

私は、ここはきつと、象の墓地ぼちなのだろうと思いました。

私はさつそく、きばを二三本拾つて、町へいそいで帰りました。主人に、このことを話して聞かせたいと、思ったものですから。

主人は、私の顔を見ると、走つて出て来ました。そして、

「まあ、シンドバッドや。私は、あの木の根が掘り返されていたもんだからね、お前は、死んだものだ、思いこんでいたのだよ。もうもう、お前には会われないとばかり、思っていたのだよ。」と言って、うれし涙なみだを流しました。

私は、さつそく、象げの小山の話をしました。

主人は、それを聞くと、よろこんで、とび上りました。

それから二人で、一しよに小山へ行きました。私の言った通りだったものですから、主人はますます目をぱちくりさせて、しばらくは物さえ言いませんでした。

やがて、

「シンドバッド、もうお前を、どれいでなくしよう。これからは、お前のすきなようにおし。それから、この象げを、お前も取つたらどうだね。うんと取つて、お金をもうけたらいいだろう。……ああ、今まで、私のどれいが何人も何人も、この象がりのために命を捨てたけれど、もうもうこれからは、そんなことをしなくても、よくなったんだねえ。まあ、これだけの象げがあつたら、今に島じゆうが大金持になつてしまう。」

と、言つたのでした。

それで私は、もうどれいではなくなりました。そして、大へんていねいにしてもらいま

した。

やがて、象げ船が入って来る時分になつて、私は、この島にさようならをしました。そして、象げと、ほかの宝物を船にいつぱいつんで、ふるさとをさして帰って来ました。

バクダッドにつくと、私はすぐその足で、カリフさまの御殿へまいりました。

カリフさまは、私を見て、大へんおよろこびになりました。そして、

「シンドバッドや、わしは、ずいぶん心配していたよ。何かまた、へんなことが起つたのではないかと思つてね。」と、おっしゃいました。

それで私は、海賊かいぞくの話と、象の話とを、お聞かせしました。

カリフさまは、びつくりなさいました。そして、私の七へんめの航海の話を、すつかり、金の字で書きしるして、カリフさまのお宝物として、だいじにしまっておくようにと、家来にお言いつけになりました。

それから私は、家へ帰つて来ました。そして、それからは、ずっと、のどかに、家にくらしています。

これで、シンドバッドの航海の話は終わりました。それから、ヒンドバッドの方へ向いて、

「さて、ヒンドバッドさん。これで、どうして私が、こんな金持になったかが、おわかりになったでしょう。もう、私が、こうして、のんきにくらしているのを、不<sup>ふ</sup>つごうだとは、お思いにならないでしょうな。」

すると、ヒンドバッドは、シンドバッドの前へ出て、ていねいにおじぎをして、その手にキツスしました。

「だんなさま、あなたさまは、そんなつらい目におあいになっても、よくがまんをなすつたからこそ、こんなお金持におなりになったのでございます。あなたさまのなすつた<sup>くろ</sup>苦勞にくらべますと、私の苦勞なんか、足もとへもよれないほどでございます。あなたは、きつと、行<sup>ゆく</sup>末<sup>すえ</sup>ながく、お仕合せにおくらしになるでございましょう。」

シンドバッドは、この答えを聞いて、大へんよろこびました。そして、ヒンドバッドに、これから毎晩、ごちそうをするから、たべに来るように、と言いました。そしてまた、金貨を百円やりました。

それで、その後、ヒンドバッドは、とうとうシンドバッドのぼうけんの話を、残らずお

ぼえてしまいましたとさ。



# 青空文庫情報

底本：「アラビヤナイト」主婦之友社

1948（昭和23）年7月10日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：京都大学点訳サークル

2004年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# アラビヤンナイト

## 四、船乗シンドバッド

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 菊池寛

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>